

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈共同研究プロジェクト紹介〉 独創・発展型：
複文構文の意味の研究
複文構文プロジェクトにおけるいくつかの話題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益岡, 隆志, MASUOKA, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000735

複文構文プロジェクトにおけるいくつかの話題

Topics in the Complex Sentence Construction Project

益岡 隆志 (MASUOKA Takashi)

1. 本プロジェクトの目標

日本語の文の研究は、単文の研究の進展状況に比べ複文の研究の進展は必ずしも十分なものとは言えない。複文の研究はそれだけ発展の余地を残しているということである。本プロジェクトの目標は、複文研究における展開の可能性を追究することである。

展開の可能性という点に関しては、考察の対象という面とその対象へのアプローチという面の両面を考慮する必要がある。前者の面については、考察範囲を広く取り、従属節と主節が直接的な依存関係を結ぶ「連用複文構文」のみならず、従属節が名詞を介して主節に間接的に結びつく「連体複文構文」も対象に加えることにする。従来の日本語の複文研究においては、連用複文に限定した研究や連用複文を中心とした研究が多く見られるが、本研究では「連用複文構文」と「連体複文構文」を考察の2つの柱とする。

また考察対象へのアプローチについても、幅広い展開の可能性を追究できるように、本プロジェクトの班を国語研の研究系を反映する形で編成した。すなわち、本プロジェクトが理論・構造研究系に属するプロジェクトであるという点に鑑み、上述の2類の複文構文を考察する「連用複文・連体複文班」を第1班とし、そのうえで、時空間変異研究系・言語資源研究系・言語対照研究系に対応して「文法史班」(第2班)・「コーパス言語学班」(第3班)・「言語類型論・対照言語学班」(第4班)を設け、全体を4つの班で構成した。

このような班編成のもとで行った共同研究の成果については、本年度内に論文集『日本語複文構文の研究』(ひつじ書房)として公開する。同論文集は、上記の4つの班に対応する形で4部から構成される。すなわち、第1部「連用複文・連体複文編」、第2部「文法史編」、第3部「コーパス言語学・語用論編」、第4部「言語類型論・対照言語学編」という4部構成である。第3部を「コーパス言語学・語用論編」としたのは、語用論のアプローチや語用論的な観点の重要性を考え、語用論にかかわる考察をコーパス言語学班の成果報告に加えることにしたためである。

本プロジェクトの全体的な成果報告は上記論文集に譲ることとし、本稿では以下、その成果のなかから特に2つの話題を取り上げ報告に代えたいと思う。そのうちの1つは連用複文構文・連体複文構文という考察対象にかかわる話題であり、もう1つはその考察対象へのアプローチにおいて重要な位置を占める南(1974, 1993)の階層構造のモデル—本稿では、「南

モデル」と呼ぶ一にかかわる話題である。以下、前者の話題を第2節で、後者の話題を第3節でそれぞれ取り上げることにする。

2. 複文構文の関係表示をめぐる言語類型

2.1 連用複文構文・連体複文構文と接続形式

複文構文は「連用複文構文」と「連体複文構文」に大別される (Shopen (2007), Dixon and Aikhenvald (2009), 益岡 (2013) 参照)。このなかの連用複文構文は、従属節と主節が直接的な依存関係を結ぶ (1) のような複文構文のことである。

(1) 短時間労働で成果が上がれば納得してもらえる。(朝日新聞 2010年6月7日)

(1) の場合、従属節「短時間労働で成果が上がれば」と主節「納得してもらえる」は「条件-帰結」の関係で結びついている。そこでは、従属節の接続部分にある「レバ」という形式がこの「条件-帰結」の関係を表示している。

このような特徴を持つ連用複文構文は、次の (2) のような形で表すことができる。従属節が主節の主要部を構成する述語 (用言) に連なるという意味において、「連用」の関係を持つ複文構文ということになる。

(2) [[.....述語 (用言) -接続形式]述語 (用言)]

それに対して連体複文構文は、連体節の修飾部分が被修飾名詞 (主名詞) を介して主節と間接的な依存関係を結ぶ (3) のような複文構文のことである。

(3) 関西を舞台にした作品が多い。(朝日新聞 2010年6月7日)

(3) の場合、連体節の修飾部分である「関西を舞台にした」は主名詞「作品」を介して主節「多い」と間接的な関係を結ぶ。そこでは、直接的な関係と言えるのは連体節における修飾部分と主名詞のあいだの関係である。連用複文構文が従属節と主節の関係を基盤として複文を構成するのに対して、連体複文構文は連体節の修飾部分と主名詞の関係を基盤として複文を構成すると言うことができる。「連体」という命名は、修飾部分が主名詞 (体言) に連なるという構成関係に基づくものである。

このような特徴を持つ連体複文構文は、次の (4) のような形で表すことができる。

(4) [[.....述語 (用言) -名詞 (体言)]述語 (用言)]

連用複文構文においては、複文構成の基盤となる従属節と主節のあいだの関係が従属節に付された接続形式により明示的に表示されるのであるが、連体複文構文においては、(4) に

示されるように、複文構成の基盤となる修飾部分と主名詞のあいだの関係は基本的に表示されない。

このように、連用複文構文と連体複文構文を並置し両者の複文構成の様式を比べてみると、複文構成の要となる連用関係と連体関係のあいだに対照的とも言える様相を見出すことができる。それは、連用複文構文における連用関係は接続形式により明示的に表され、他方、連体複文構文における連体関係はそのような明示的な表示を持たないという点である。

ちなみに、連用複文構文に現れる接続形式は実に多彩であるが、そのなかで特に注意を惹くのが益岡（2013、近刊）で「接続形式の分化」と呼ぶ現象である。そのような接続形式の分化の事例として、益岡（近刊）では、次の（5）と（6）のような「中立形接続」とその中立形から分化した「テ形接続」の関係を論じている。

（5） 駅前に白いビルがあり、そのビルの1階に銀行がある。

（日本語記述文法研究会編（2008））

（6） 駅前に白いビルがあつて、そのビルの1階に銀行がある。

（日本語記述文法研究会編（2008））

2.2 関係表示をめぐる言語類型

2.1 では連用関係は接続形式により表示され、連体関係は明示的な表示を持たないということを指摘した。次に、日本語におけるこのような連用・連体の関係表示のあり方を言語類型の観点から眺めてみたい。ここでは、日本語を相対化するために、「連用複文構文」・「連体複文構文」という日本語に特化した名称の代わりに、「述語修飾複文構文」(adverbial complex sentence constructions)、「名詞修飾複文構文」(adnominal complex sentence constructions) という名称を用いることにする。

複文構文における関係表示という点を再度確認しておく、述語修飾複文構文のほうでは従属節と主節のあいだの関係表示の様式が、名詞修飾複文構文のほうでは名詞修飾節の修飾部分と主名詞のあいだの関係表示の様式が、それぞれ問題になる。この点に関して、日本語は述語修飾複文構文における関係表示は明示的であり、名詞修飾複文構文における関係表示は非明示的であるということであった。

ここで、述語修飾複文構文・名詞修飾複文構文における関係表示の様式としてあり得るタイプを想定してみると、前者が明示的で後者が非明示的というタイプ（「A型」）、前者が非明示的で後者が明示的というタイプ（「B型」）、両者が共に明示的というタイプ（「C型」）、両者が共に非明示的というタイプ（「D型」）という4つのタイプが考えられる。日本語はこのうちのA型に該当する。検討を要するのは、日本語以外の諸言語がどのタイプに属するのかという点である。

この点にかかわって、ここでは米田（近刊）の研究を紹介したい。米田（近刊）はバントゥ諸語の名詞修飾節の形式と意味を中心に考察したものであるが、そのなかで、名詞修飾節と副詞節（述語修飾節）における意味関係の表示様式がヘレロ語とスワヒリ語で大きく異なる

ことを指摘している。すなわち、米田（近刊）によれば、ヘレロ語については、名詞修飾節では主名詞と修飾部分のあいだの意味関係が接続形式によって明示的に表し分けられる一方で、副詞節では主節とのあいだの意味関係が接続形式では表し分けられず、文脈など接続形式以外の要素で解釈されるとされる。対照的に、スワヒリ語については、名詞修飾節において主名詞と修飾部分の意味関係が接続形式で明示されない一方で、副詞節と主節の意味関係は接続形式により表し分けられるという。

米田（近刊）のこの指摘を上記の複文構文の関係表示に関する類型という観点から捉えれば、ヘレロ語は、述語修飾複文構文における関係表示が非明示的で、名詞修飾複文構文における関係表示が明示的であるというB型に属するものと考えられる。それに対してスワヒリ語は、日本語と同様に、述語修飾複文構文における関係表示が明示的で、名詞修飾複文構文における関係表示が非明示的であるというA型に属するものと見られる。関係表示に関する言語類型の観点から眺めると、同じバントゥ諸語のなかのヘレロ語とスワヒリ語が対照的な型に属するという点は、極めて興味深い事実である。

3. 南モデルにおける論点

3.1 南モデル

次に、複文構文の分析において重要な位置を占める「南モデル」に話題を転じる。南モデルの構築は1960年代に遡るものであるが、複文の本質を捉えた南モデルの日本語複文研究における影響力は現代に及んでいる。本プロジェクトで実施した研究発表会・ワークショップ・シンポジウムにおいても、南モデルは多くの発表において言及された。

南モデルによる複文の分析の要諦は、従属節内に生起し得る要素の分布を観察することにより、従属節—南は「従属句」と呼ぶ—に「A類・B類・C類」という3つの類を区別する点にある。このなかのA類というのは、(7)の「～ナガラ」のような従属節である。

(7) 一人の女がタバコをのみながらしゃべっていた。

「～ナガラ」の節内に主に生起するのは、述部では用言や使役・受身などヴォイスにかかわる要素であり、述部以外では格成分や状態・程度副詞である。

B類というのは、(8)の「～ノデ」のような従属節である。

(8) 昨夜はホテルの静かな部屋でゆっくり寝たので、今朝は気分がいい。

「～ノデ」の節内に主に生起するのはA類の要素の他に、述部では丁寧さにかかわる要素や過去のようなテンスにかかわる要素であり、述部以外では時の修飾語や場所の修飾語である。

またC類というのは、(9)の「～ガ」のような従属節である。

(9) たぶん彼も来るだろうが、少し遅れるかもしれない。

「～ガ」の節内に主に生起するのはA類・B類の要素の他に、述部では推量を表す要素や意志を表す要素であり、述部以外では「～ハ」などの主題を表す要素や「たぶん」類の副詞である。

上記の点を代表的な生起要素に絞って整理すれば、次の(10)のようになる。

(10) A類・B類・C類とその生起要素

A類

述部：用言，ヴォイス表示要素

述部以外：格成分，状態・程度副詞

B類

述部：A類の要素，テンス表示要素

述部以外：A類の要素，時の修飾語

C類

述部：A類・B類の要素，モダリティ表示要素

述部以外：A類・B類の要素，主題，モーダル副詞（「たぶん」類の副詞）

南モデルでは、このように、A類・B類・C類を区分する際、節内に生起可能な要素を述部と述部以外という2つの部分で見るとは、そこで見逃さないのは、各類において述部の要素と述部以外の要素が対応関係にあるという点である。A類におけるヴォイス表示要素と格成分との対応、B類におけるテンス表示要素と時の修飾語との対応、C類におけるモダリティ表示要素とモーダル副詞との対応などがその典型である。益岡（近刊）では、南モデルにおけるこのような述部要素と非述部要素の分布のあり方を「述部・非述部対応の原則」と名づけた。

3.2 「述部・非述部対応の原則」とテ形節

上記の「述部・非述部対応の原則」にかかわって注目されるのが2.1で触れたテ形接続の節（「テ形節」）である。テ形節は「並列・時間（継起）・論理（広義因果）・様態」の関係を広範に表す連用節として特異な存在であるが、「述部・非述部対応の原則」に反するという点でも注目に値する。以下、益岡（近刊）に基づいてこの点の概要を述べる。

「述部・非述部対応の原則」に反するというのは、テ形節がその表す意味に応じて、述部の特性を保持したまま非述部を拡張させることである。主要部である述部を見るかぎり、テ形節はそれ自身でテンス・モダリティを表示することはしない。テ形はテンス・モダリティの表示を欠く非定形（nonfinite form）である。テ形節は、非定形の述語を取ることから非定形節（nonfinite clause）と見ることができる。南モデルで言えば、A類に当たる。テ形節が非定形節（南モデルにおけるA類）であるという見方は、既に三上（1970）や Bisang（2007）

など多くの研究で指摘されている（ベデル（1989）参照）。

問題は、非述部に生起する要素の分布である。非述部には、テ形節が表す意味に応じてB類・C類の要素が生起し得る。例えば「時間（継起）」や「論理（広義因果）」を表す場合、(11)に示されるように、非述部において時の修飾語（B類の要素）を取ることができる。

(11) この地区は、去年巨大なショッピングセンターができて、行き交う人が増えてきた。

また、対比の意味を表す場合、(12)に示されるように、話し言葉では主題（C類の要素）一ただし、この場合、対比の意味を帯びる「対比主題」一の生起が可能である。

(12) ミカンは実を食べて、金柑は皮を食べます。

このように、広範な連用関係を表すテ形節は、その意味に応じて非述部でB類・C類の要素の生起を許容する形で拡張される。テ形節は主要部である述部においては非定形節の特性を保持するのであるが、非述部における拡張を許容するという点で、非定形節としては変則的な性質を持つ。日本語のテ形節に認められるこのような「変則的非定形節」とでも言うべき特性は、節の定形性をめぐる議論に1つの論点を提供するものと考えられる。

●参考文献●

- ベデル, ジョージ(1989)「日本語には定動詞があるか」久野暲・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』125-137. 東京:くろしお出版.
- Bisang, Walter(2007)“Categories that make finiteness: Discreteness from a functional perspective and some of its repercussions.” In: Irina Nikolaeva(ed.) *Finiteness*, 115-137. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald(2009) *The semantics of clause linking*. Oxford: Oxford University Press.
- 益岡隆志(2013)「複文構文と接続形式—接続形式の分化を中心に—」『日本語学・日本語教育 1』339-351. ソウル:日本語学と日本語教育刊行委員会.
- 益岡隆志(近刊)「日本語の中立形接続とテ形接続の競合と共存」益岡隆志他(編)『日本語複文構文の研究』東京:ひつじ書房.
- 三上章(1970)『文法小論集』東京:くろしお出版.
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』東京:大修館書店.
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』東京:大修館書店.
- 日本語記述文法研究会(編)(2008)『現代日本語文法 6: 第11部 複文』東京:くろしお出版.
- Shopen, Timothy(2007) *Language typology and syntactic description Vol.II: Complex constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 米田信子(近刊)「バントゥ諸語における名詞修飾節の形式と意味」益岡隆志他(編)『日本語複文構文の研究』東京:ひつじ書房.

《要旨》 複文構文プロジェクトの目的は、日本語複文構文研究のさらなる発展の可能性を提示することである。考察対象に連用複文構文と連体複文構文の両方を掲げるとともに、歴史言語学、コーパス言語学、対照言語学などからの広範なアプローチを試みる。本報告では、複文構文プロジェクトの研究成果のなかから、2つの話題を紹介する。1つは連用節と連体節における接続形式の現れ方に関する言語類型の問題であり、もう1つはテ形節の定形性/非定形性の問題をめぐる話題である。

Abstract: The purpose of the Complex Sentence Construction Project is to present developments in research on Japanese complex sentence constructions. Covering both adverbial and adnominal clause constructions, the project adopts multilateral approaches and methodologies, e.g., those of historical, corpus, and contrastive linguistics. The present report focuses on two specific topics, based on the results so far. The first topic is concerned with language typology and the conjunctive forms that appear in adverbial and adnominal clauses. The second topic touches on the issue of finiteness/non-finiteness in *-te* clauses.

益岡 隆志 (ますおか・たかし)

神戸市外国語大学外国語学部教授。博士（文学）（神戸大学）。神戸市外国語大学講師，神戸市外国語大学助教授を経て、1995年4月より現職。2010年4月より国立国語研究所理論・構造研究系客員教授。

主な著書・論文：『命題の文法』（くろしお出版，1987），『複文』（くろしお出版，1997），『日本語モダリティ探究』（くろしお出版，2007），『日本語構文意味論』（くろしお出版，近刊）。

社会活動：日本言語学会評議員，日本語学会評議員，関西言語学会運営委員など。

独創・発展型共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」

プロジェクトリーダー 益岡隆志

（神戸市外国語大学 外国語学部 教授／国立国語研究所 理論・構造研究系 客員教授）

プロジェクトの概要

日本語の複文の研究は単文研究に比べ個別的な研究に偏りがちな傾向にあり、その進展は十分なものとは言いがたい。その現状を踏まえ、本プロジェクトでは、日本語の複文研究に携わっている研究者の共同研究により、複文の総合的研究を行う。本プロジェクトは、考察対象を連用複文構文と連体複文構文に広げるとともに、考察の観点についても文法史、コーパス言語学、言語類型論など広角的なアプローチを採用することにより、多様な研究の方向へ発展させることを目指す。